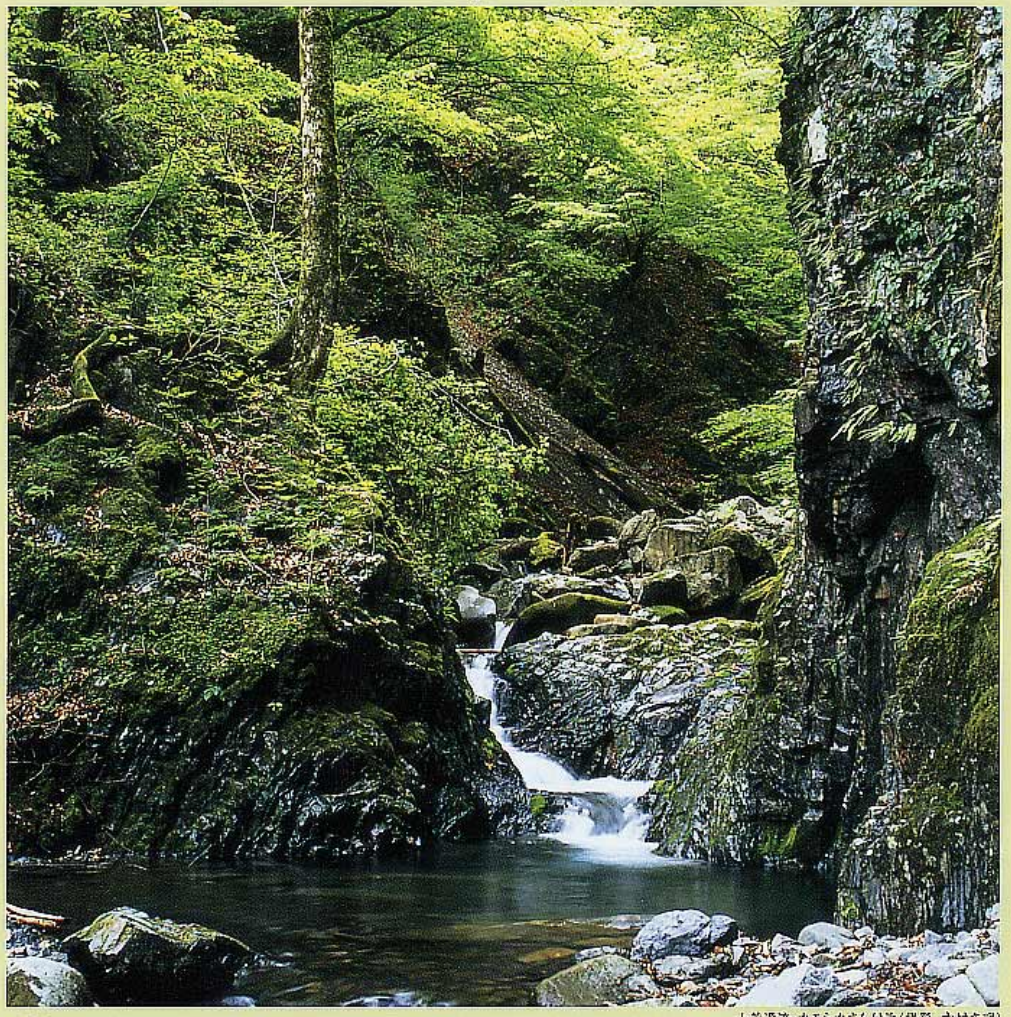
# 源流の四季

第5号(2002年4月) 春
Spring

発　行　所／多摩川源流研究所 〒409-0211 山梨県北都留郡小菅村4363
TEL 0428(87)7055 FAX 0428(87)7057
発行責任者／中村文明
協　　力／多摩川源流観察会
印　　刷／(株)サンニチ印刷
http://www.tamagawagenryu.net
E-mail:genryu@mxa.cosmo.ne.jp



小菅源流・カモシカ立ち村近(撮影　中村文明)

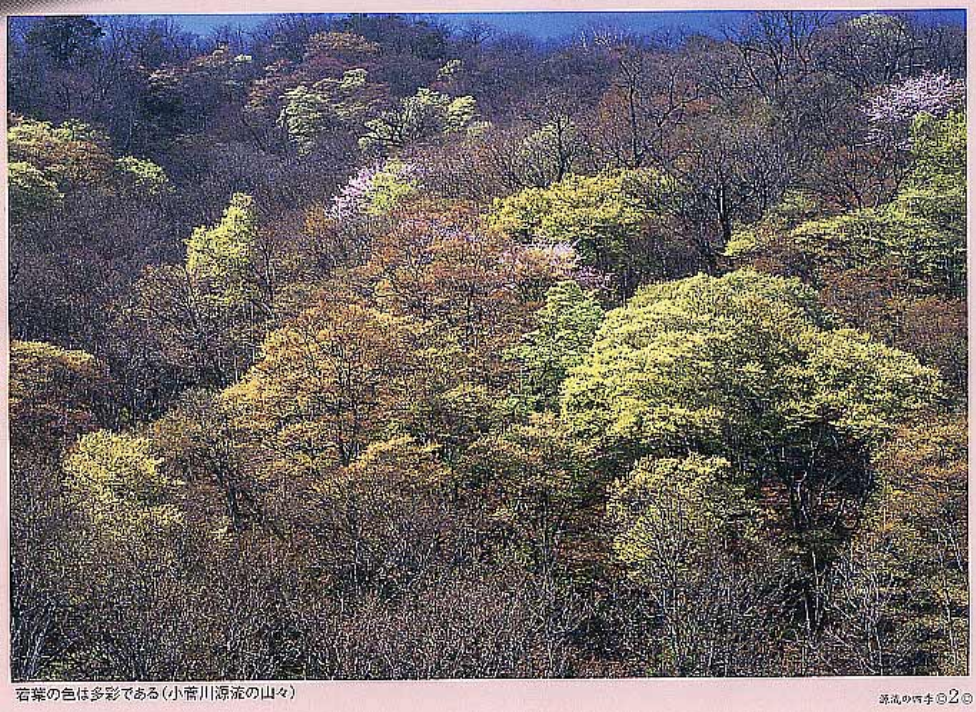
## Contents 目次

源流の春……2・3
殿下源流域をご視察……4
「多摩川源流写真展」「源流域第2回助役会議」……5
丹波山の「ささら獅子舞」・「林相調査への意見」……6・7
イベント紹介・参加者募集……8

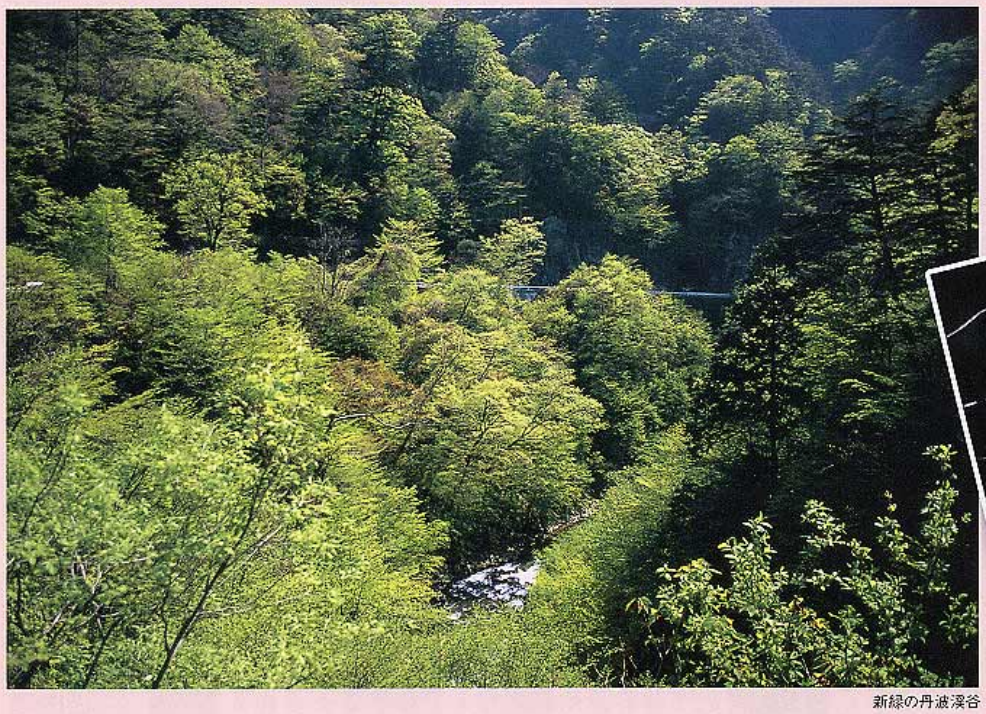
# 源流の春

氷柱の花と雪に覆われていた源流のそこここに
ミツバツツジの赤紫の花が山肌を染める頃
森の木々が天のお告げに合わせて一斉に芽吹き始める
逆光に生える新緑の輝きは生命の躍動を伝えている

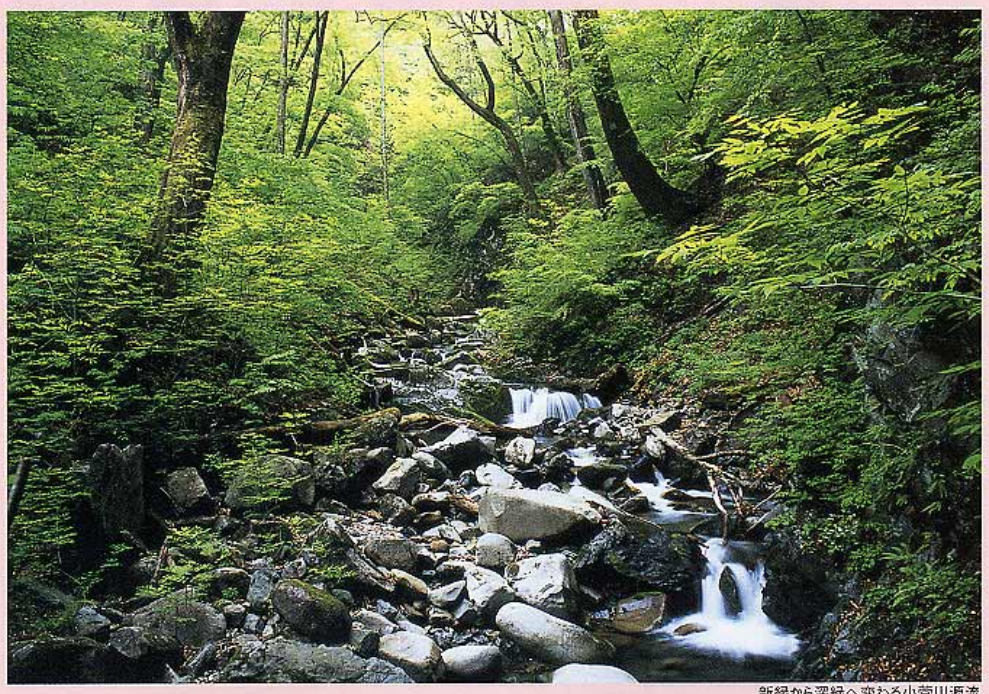
リュウブの新芽（塩山・柳沢川）



若葉の色は多彩である（小菅川源流の山々）



新緑の丹波渓谷



新緑から深緑へ変わる小菅川源流

# 寛仁親王殿下が多摩川源流を御視察

## 都水源林百周年を記念して

寛仁親王殿下をお迎えして「寛仁親王殿下多摩川源流域御視察記念式典」が、平成十三年十二月十八日、丹波山村郷土民俗資料館で盛大に開催され、地元四市町村を始め、川崎市、世田谷区など流域の市民も多数参加しました。

記念式典は、東京都水源林百周年記念事業の一環として都民の水を生み出す源流域を殿下に直接御視察いただこうと、塩山市、奥多摩町、丹波山村、小菅村が共同で実行委員会を結成して計画したもの。実行委員会事務局には、四市町村に加えて都水道局水源管理事務所、多摩川源流研究所、国土交通省京浜工事事務所が加わりました。

殿下、尾崎行雄記念碑の前で記念撮影（12月18日）

殿下、源流研究所で記念撮影

### 三枝市長が代表挨拶

当日は、副実行委員長の守屋武彦丹波山村長が開会の挨拶を述べ、続いて実行委員長の三枝剛塩山市長が代表の挨拶を行いました。三枝市長は「本日ここに寛仁親王殿下の多摩川源流域御視察の栄を賜り、記念式典がこのように盛会に開催されますことに感激しあまつさえ陪席を賜りましたことを身にあまる光栄と感謝いたしております。本年は多摩川源流域で東京都の水源涵養林の経営が開始されて百周年という記念すべき節目の年を迎えています。こうした折に寛仁親王殿下をお迎えできましたことは一同、この上ない喜びであります」と歓迎の挨拶を述べました。

### 源流を都民に伝えたい

続いて殿下から「山梨県にひろがる源流が都民の水を生み出していることを初めて知ったし、水源林の役割と重要性に深い感銘を受けた。このことを機会ある毎に都民に伝えたい」との心のこもったお言葉をいただきました。また、ご同行の尾崎行雄氏の三女である相馬雪香様や、岡田重信都水道局次長からそれぞれ挨拶を頂き、最後に副実行委員長の大舘誉奥多摩町長が閉会の挨拶を行いました。

記念式典終了後、殿下は多摩川源流研究所と小河内ダムを御視察になりました。源流研究所では、廣瀬文夫小菅村長が源流研究所設立の経緯と目的を簡潔に説明し、中村文明所長が源流研究所に展示された源流の写真を紹介しました。殿下は記念式典に先立ち尾崎行雄記念碑を御視察になられました。

## 源流研究所運営委員会を開催

### 宮林委員長あいさつ「源流のブランド化を」

源流研究所は一月二十六日、小菅村役場会議室で運営委員会を開催し、設立以来の活動を点検し、来年度の事業計画を審議し確認しました。運営委員会には、宮林茂幸委員長をはじめ、九名の運営委員、小菅村から廣瀬村長、古家助役、奥秋総務課長、青柳振興課長が、研究所の中村所長、佐藤事務局長、井村主任研究員が出席しました。

宮林委員長は「この間源流研究所は大変多忙な活動を展開し、源流体験教室など貴重な実績をあげてきた。二十一世紀は環境の時代。地域の自然、歴史、文化を生かした村づくり、子供達がいつでもこられる体制づくり、サービスの充実と源流のブランド化を図ることが大切だ」と挨拶の中で強調しました。

### 廣瀬村長があいさつ「新しい方向探りたい」

廣瀬村長は、「水源林の調査活動などを通して、原生林の良さが注目されるなど地元でも自然を生かした村づくりを進めたい。ご意見を頂き、新しい方向を探りたい」と挨拶しました。

運営委員会は、研究所の活動報告と次年度の事業計画の提案を受けて質疑と意見交換を活発に行いました。今年度の重点課題として、研究員制度の確立、多摩川源流ファン倶楽部の組織化、研究所企画委員会の検討などに取り組むことを確認しました。

# 盛況の「多摩川源流写真展」

## 調布市文化会館たづくりで開催

多摩川源流研究所は、三月八日から十四日までの一週間、調布市文化会館たづくり・みんなの広場で、「多摩川源流写真展」を開催しました。八日に行われたオープニングセレモニーには、都議会議員遠藤衛先生、調布市の吉尾勝征市長、鈴木正昭議長、松本嘉郎助役、写真家の鍔山英次さん、小菅村の守重市平収入役、源流研究所運営委員で川崎市の田中喜美子多摩川と語る会代表など六十人を超える市民が参加しました。

挨拶の中で遠藤先生は、「昨年秋、水源の森の調査で小菅村に出向いた。そのことが契機で今日の写真展が実現した。水と森の大切さをアピールするいい機会だと思う。多くの都民に源流のことを知って欲しい」と話していました。

また、吉尾調布市長は、「多摩川をこよなく愛する市民の一人として写真展の開催を心から歓迎します。いにしえの昔から、私たちは、多摩川の恩恵にあずかってきたが、多摩川の源流がこんなに素晴らしかったのかと思うと、この上もない喜びである。これを機に源流との心のかよった交流を一層進めたい」と挨拶しました。

テープカットする遠藤先生（右から二人目）ら（3月8日）

写真展の会場をうめた市民（調布市文化会館たづくり）

## 静かな感動を覚えました

写真展には、連日多くの市民が足を運んでくださり、五百部用意した写真説明が三日目には無くなるほどの盛況ぶりでした。土曜・日曜には、小菅村の「源流水」によるコーヒーが市民に振る舞われ大変好評でした。写真展を訪れた市民は、「源流の自然に触れて心が洗われる想いでした。友達にも是非見るように勧めます」「荘厳、源流の深い緑と岩の中に吸い込まれるような、静かな感動を覚えました。多摩の自然の尊さを再認識します」「大自然の美しさ、厳しさに魅了されました。また、連れて行ってほしい、行きたい」と感想を話していました。

# 源流域の第二回助役会議開かる

## 協調体制確立に向け検討を開始

源流域の塩山市、奥多摩町、丹波山村、小菅村の関係市町村の第二回助役会議が、平成十四年二月二十二日、塩山市甘草屋敷で開かれました。この会議には、塩山市の日原健次助役、奥多摩町の川村文夫助役、丹波山村の伊藤巌助役、小菅村の古家成勝助役と各市町村の担当者、及び源流研究所から中村文明所長が出席しました。

はじめに日原助役は、「先月の第一回会議の取り決めにより、各市町村から担当者も参加いただいた。今日は、源流域の協調体制のあり方について、次いで水源林周囲の原点について、そして、源流域の協同の模索についてなどに関してそれぞれから率直な意見、提案を出していただきたい」と挨拶しました。

これを受けて、川村助役から、「源流協議会的な組織の立ち上げが必要だと思う。協議会の目的や趣旨を明確にして、首長による協議会を置き、その下に助役会や幹事会を設け、事務局を置いていく。いずれにせよ、協議会の目的をはっきりさせ、その役割を狭めないで共通する課題を取り上げていくようにしたらどうか」との意見がありました。

また、伊藤助役から、「昨年秋に開かれた殿下を迎えるための会議の席上で、三枝市長の見解が示され、源流域の協調体制を確立しようという方向が全員で了承された経緯がある。担当者の事務局で協議会の目的などを定めた原案を検討していただきたい」との発言がありました。

これを受けて、日原助役が協議会の目的、事業内容、組織体制、分担金などの内容を含んだ規約案を担当事務局で検討していただいて良いかどうかを全体に図り、了承されました。助役会議では、この後熱心に水源林の経過に関する学習を深めました。

第2回助役会議（塩山市甘草屋敷　2月22日）

# 丹波山のささら獅子

多摩川源流域の市町村には、丹波山村のささら獅子、お松引き、小菅村の神楽、奥多摩町の獅子舞、塩山市一ノ瀬高橋の春駒などの貴重な民俗芸能が数多く残っています。さらに、釣りや山菜採りの名人などが沢山活躍しています。このシリーズでは民俗芸能の保存に尽くされている方々や様々な名人・達人を紹介します。第一回目は、民俗芸能に造詣の深い丹波山村の伊藤巌前助役に丹波山村の「ささら獅子」を語っていただきました。

丹波山村
伊藤　巌前助役

丹波山村の「ささら獅子」は、関東から東北地方にかけてある一人立ち三頭立ての獅子舞で、国中地方の二人ないし三人使いとは異なり、山梨県下では北都留地方だけで行われている珍しい芸能であります。

その中でも女装をした「ささら」一対ずつを持った花笠役を四方に配置しているのは、四天王とも四方がためとも言われ、丹波山だけの特長で古い伝書をもった芸能としても知られており、昭和三十七年十月、山梨県民俗芸能総合公演に出場して絶賛を博し、昭和五十四年三月山梨県無形文化財に指定され現在に至っています。

この獅子は、第八十八代後嵯峨天皇の御代に京都の紫宸殿に貴神を集めて花見の宴が催された際、その宴の中ばに、はるか南の方に黒雲が現われ三つの光を発したかと思う間もなく、たちまち紫宸殿の上に百雷が一時に落ちたかの様な大音響とともに大きな獅子頭が三個降ってきました。

丹波山のささら獅子

天皇は勅使をたてて清水に伺いをたてたところ獅子の頭に羽根を据えて舞をするようにとのお告げにより、鎌倉へ勅使を立てて芸人を探させたところ北条氏の手によって下総の国の百姓角兵衛が堪能とわかり、七日間で舞い方を工夫するよう命じました。

角兵衛は、弟の角内、息子の角助とそれぞれ別々の流儀を編出し御覧に入れた結果、角兵衛の芸が最も優れていたので以後、舞をする場合は、角兵衛流を最初にするよう巻物が与えられたと伝えられています。

さらに「日本獅子舞の由来」によると武州多摩郡三田領沢井村（現在の東京都青梅市沢井）の名主福島源三郎という人が角兵衛の末孫の山崎角太夫を招き村内の若者に伝授したのが寛文元年のことで、この沢井の福島新佐衛門という人が丹波山村の名主岡部家へ婿入りし、沢井から人を招いて習わせ以来盛大に行われてきたと伝えられています。

またこの獅子は、毎年七月十五、十六日の両日行われる祇園祭りに「道中おかぐら」を舞い午ら村内の各神社に獅子舞を奉納する習わしがありますが、昔は疫病、雨乞いなどにも臨時に行われていた様です。

舞い方には、幣がかり、白刃、帯がかり、笹がかりなどが演じられますが古くは十二通りを演じていたといわれています。

この三頭立ての獅子は、黒色が太夫、茶色が小太夫、朱色が雌獅子で頭に烏の羽根をつけ、あごの下に踊り手の体をかくす牡丹唐草の布をたらし、麻布地の襦袢にタッツケを着用し、草鞋ばきのいでたちです。

ささら摺りの扮装は、女装して花笠を冠り両手に竹で造ったささらを持ちます。

白刃の舞をする二人は、頭に白鉢巻、白襦袢にタスキ掛け、黒の野袴を着用し手に一刀をもって踊ります。

笹がかりも、白刃の舞と変わらない踊り方をしますが、帯がかりは刀の代わりに長い帯を首から下げ二人で太夫、小太夫の一頭ずつをあやつりながら踊ります。

幣がかりは、一本の幣を前方に立て、太夫、小太夫の二頭が交互にこの幣にかかる舞です。

以前はこの獅子頭を名主の守岡家に保管しており祭典の最初と最後には守岡家の庭でこの幣がかりが行われました。

現在は、村の文化財保存庫に保管されていますが、幣がかりは、守岡家の庭で今でも舞われています。

また、裏方として、太鼓一人、笛三人、唄二人の鳴物がつきます。

近年は、小中学生を指導し、後継者の育成に当って好評を得ており、存続が期待されているところです。

## 獅子舞唄（短歌）

一　京から下りし唐絵の屏風
　　一重にさらりと
　　引き廻わしゃいな

二　廻われや車は永車
　　早く廻わりて
　　関所を廻わる

三　月も日も西へ西へと
　　尾を引きやる
　　お花がくれに引けよ小雲

四　日は暮れる道の小草に
　　露がもつ
　　お暇申していざ帰らいな

五　今朝の寒さに
　　朝霜が降りて
　　そこで女獅子が
　　かくされた

## （長唄）

一　この森に
　　タカが巣かけて鈴の音
　　鈴じゃあるまい
　　御かぐらの音

二　この庭は
　　良い日良い月築主てて
　　月に三度の
　　米（ヨネ）が降りそろ

三　これのお庭を見てあれば
　黄金小笹に米が降りそろ
四　鍵取りが
　　蔵の出口で昼寝して
　黄金枕で米をふみそろ
五　この獅子は
　　悪魔を払う獅子なれど
　余りせくとて
　　角がもげそろ
六　鳥居垣皆はえて
　参る氏子は繁盛なるらん

七　この宮は飛騨の
　　工（タクミ）の建てし宮
　くさび一つで
　　四方（ヨモ）を固める
八　この宿は
　　縦が十五里、横七里
　入場よく見て
　　出場に迷うな
九　千本松、万本松
　　小竹にしめ張りて
　氏子集まり今日のお祭り

十　富士のお山の手かけ松
　　一枝たぐめて勝を休める
十一　やまがらが
　　山をはなれて三つ連れで
　これのお森で羽を休める
十二　しらさぎが、
　　これのご門を飛ぶ時は
　祈り落とさんこれの神主

次回は（二）「お松引き」の予定です。

# 源流・水源の森「林相調査」に関して―①

源流研究所発行の「源流の四季」・第4号掲載の「源流・水源の森『林相調査』を開始」及び、これに関係する一月二十九日付け朝日新聞山梨版「多摩川源流・水源に天然のシオジ林」「ブナ・ナラ・豊かな落葉樹林と確認」「原始の森に近い」の報道に関して、長年水源林の管理に携われてこられた水源管理事務所奥多摩出張所の堀越弘司氏からご意見・ご批評が寄せられていますので二回に渡り紹介します。

## 天然林をどう捉えるか

堀越　弘司氏

本誌第4号及び朝日新聞・山梨版に報道された「源流・水源の森・林相調査」について、水道水源林において、37年間にわたり「水と森」をテーマとして森林管理に従事してきた者として、非常に気がかりな部分があったので、2回にわたり私見を披露する。

今後の源流研究所の活動の参考になれば幸いである。

### 多摩川源流域におけるブナ林衰退について

新聞記事の中には、「シオジ林は、ほとんど人工林なのに、この場所では天然更新の森林が広がる。」（要旨）など、他にあまり害を及ぼさず、苦笑を誘うだけですむ誤解もある。しかし、地球温暖化にからめたブナ林衰退が語られ、さらに、ブナの人工的な更新に話題が及ぶのを眼にしたとき、危機感を抱いた。

「源流の四季」第4号における源流・水源の森「林相調査」に関する文章では、「スズタケにより林床が閉鎖されているため、ブナの更新が阻害されている。このままでは、将来この地域においてブナ林が消滅する。」としている。しかし、新聞記事は、この部分でさらに踏み込み、スズタケの刈り取りによるブナの人工更新（下種更新の環境作り）に話が及んでいる。記事の論調から、この話題は源流研究所サイドから提供されたと読みとれる。

「源流の四季」への記載を自重した（？）ブナの人為による更新に関する話題を、なぜ、記者に提供したのか。これは、源流研究所が、その必要性を感じている証ではないだろうか。学術調査報告の形では書けないことを、新聞報道の名を借りて意思表示したと見るのは、穿ちすぎであろうか。

次に、ブナ林の消滅に関する記述である。

「源流の四季」では、「この見事なブナが消滅したら困る…」との感想の形で書かれているが、新聞記事では、前述のように、筈の刈り払いによる更新にまで話が及んでいる。このことから、源流研究所としては、ブナ林の消滅について危機感を持っていることが伺える。

果たして、ここ多摩川の源流域において、ブナ林が衰退することが、森林生態学的にみて危機的な状況なのであろうか。

東京学芸大学教授である小泉武栄先生は、その著書で、「太平洋側（気候帯として）のブナ林は、小氷期のレリック（遺物）である。」（要旨）と述べている。

私は研究者ではないが、多摩川流域だけでなく、函南（神奈川県）のブナ巨樹を擁する森や、秋田県や群馬県に広がるブナ林を歩き回った限りにおいては、この小泉先生の説には説得力があるものと思っている。

小泉先生が書かれているように、太平洋側のブナ林では、スズタケなど地表を覆う笹類が皆無の場所においてさえ、次世代の苗木を見ることがほとんどない。種子の豊作を背景として、表土露出部において、実生苗の発芽は観察されることもあるが、翌年中には、ほぼ全滅し、苗木として育つことはほとんどない。これらについての検証を行わずに、この地域における状況を訴えることはいかがなものであろうか。

私は、ここに危うさを感じる。

なぜなら、この背景には、源流の森として「ブナ林」が望ましい、といったブナ林の過大評価に立脚した森林の捉え方、さらには、それに基づくイベント開催の危惧を感じ取るからである。

次号では、ブナに拘わる「水源の森づくり」の危うさについて記述する。

Event Information

# イベントの紹介・参加者募集！

源流研究所では、源流と流域の交流を推進することで村の活性化に貢献しようと今年も、「源流・大菩薩探訪の旅」「源流古道水源林体験の旅」を企画しました。友人を誘ってどしどし参加してください。定員は先着順でいずれも二十五名です。お申し込みお問い合せは源流研究所まで。

## 第十六回多摩源流まつり

村民あげてのおもてなしをコンセプトに、楽しいステージ、伝統芸能・神楽の披露、特産物の販売、魚のつかみ取り、「源流そば」「ヤマメの塩焼き」など子供から大人まで一日ゆっくり楽しめる源流のお祭りです。

◎主催／小菅村
◎日時／五月四日　十一時より
◎場所／小菅村村民スポーツ広場

## 「源流・大菩薩探訪の旅」

この企画は昨年大変好評でした。探訪の旅ではあまり知られていない南大菩薩を歩きます。小菅村の日向沢登山口から登りはじめ、大菩薩峠、熊沢山、石丸峠、天狗の頭、牛ノ寝を経て雛滝上流に下るコースです。

友達を誘って新緑の森を歩きませんか。

◎日時／六月八日・九日
◎集合場所／JR奥多摩駅
◎費用／一万三千円
◎対象／山歩きに自信のある方

▲源流大菩薩探訪の旅（2001年6月9日）

## 「源流・水干探訪の旅」

多摩川は、塩山市の笠取山にある水干から、百三十八キロ旅して東京湾に注ぎます。

あなたの目で多摩川の最初の一滴を確かめてみませんか。

◎日時／六月二十九・三十日
◎集合場所／JR奥多摩駅
◎費用／一万三千円
◎対象／山歩きに自信のある方

## 源流古道・水源林体験の旅」

昨年大好評だったこの事業はこれから三年かけてAコース、Bコース、Cコースと廻ります。松姫峠から、大菩薩、柳沢峠、笠取山、唐松尾山、将監峠、飛竜山、雲取山までの壮大なルートをあなたの足で歩いてみませんか。今年はAコースです。

◎Aコース／松姫から柳沢まで
◎日時／八月九・十・十一日
◎集合場所／JR奥多摩駅
◎費用／一万八千円
◎対象／山歩きに自信のある方

▲源流古道・水源林体験の旅（2001年8月3日）

## Voice みんなの広場

読者のみなさんの声をご紹介します。

〔冬号全体に関して〕

＊美しい写真が沢山あり、読み易く、かつ解りやすく見ごたえがありました。

＊多摩川の源流を目指している一人として、早く到達したい気持ちでワクワクしてきました。

＊表紙のカタクリの花をはじめ、見開けば源流の冬の写真の美しさに見入りました。多摩川の源流を守り河口までの自然を守るための努力に敬服しています。

＊一滴の水滴から源流となり、やがて大河となる自然と天然の美しい変化を多摩川に感じながら余生を送りたいと思います。

＊一人で見るのは勿体無いので、誰々に見せてあげたいそう思いました。孫の通う小学校は四年生で川を学ぶので届けます。

〔新春特別対談に関して〕

＊新市長さんの生まれや自然へのかかわりがわかり、とても身近に感じました。

＊阿部市長、中村所長、お二人の源流を愛し、守り、その美しさを広く皆に伝えたいという情熱が伝わってきました。

〔林相調査に関して〕

＊林相調査は山を愛し川に想いをめぐらす人にとって、一番大切な事だと思います。

＊水源林の調査、すばらしいことですね。実際に調査に参加している人達の感動が伝わってきました。そして出来る事なら、まだ見たことのないシオジの天然更新の様子や、ジゾウカンバを一度見たい、そんな思いで胸が一杯です。実現を心から願っています。

＊水源林の木々を守ることは最も大切な事と思います。

＊継続調査が行われ、水源林の自然を守っていくには、どういう事ができるのかの呼びかけもお願いします。

＊林相調査のほかに野草や野鳥の調査もあればいいなと思います。

この他に、「源流研究所の住所記載内容に、郵便番号を加えたほうが良い」という指摘もいただき、今回から改善しました。どうもありがとうございます。今後も読者の皆さんからの声をお待ちしております。